

アフリカの人々と名付け 36

イニシエーションと名前の論理——死者称(祖霊名)から父称へ

小馬 徹

擬似死者称と女性

キプシギスの女性が婚入直後に貰う「Aの母」(Obot A)という独自の擬似子称は、夫の父系の祖霊が彼女の初生児に再来してその魂となるという観念に依拠している。それゆえ、この擬似子称は、子供の正式の名前である「祖霊名」(*kainetap oindet*)と同じく「死者称」(*ne-cronym*)でもある。子称は下の世代を起点に上の世代を、逆に死者称は上の世代を起点に下の世代を系譜上に位置づけるものだ。キプシギスの擬似子称は子称 (*teknonym*) であると共に死者称でもあり、名前によって個人を系譜上に位置づける正反対の二つのベクトルを一つの円環へと統合している。前回の記事をこのように要約できる。

小川了は、C.ギアツの考えを受けて、子称の思想とは「過去からの遺産を受け継いだものとしての個人を重視するのではなく、今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する個人が重視される」思想であると述べた[「文明のなかの名づけ」、梅棹忠夫・小川了(編)『ことばの比較文明学』、1990]。ところが、キプシギスの場合、子称・擬似子称は同時に死者称でもあるゆえに、この見方だけでは汲み尽くせない。それは、現在ではなく過去を未来へと接続する思想をはらんでいるからである。

するとキプシギス社会では、女性は他氏族から婚入し、過去を未来に繰り入れる事によって氏族を再生産する役割を担う存在だと言える。

生命原理としての名前

より厳密に言えば、名前 (*kainet*) の次元では、歴史は父から息子へではなく、祖父から孫息子へと受け継がれて行く。そして、キプシギス人は *kainet* をもまた生命原理の一つとして捉

えて来た[小馬徹「キプシギスの『火』のシンボリズム」、和田正平(編)『アフリカ民族学的研究』、1987]。生命としての *kainet* を理解するには二本の糸束から一本の綱をなっていく様——あるいはDNAの二重螺旋構造——をイメージすればいい。その一本は私から私の孫息子へと、もう一本は私の父から私の息子へと続く無数の糸からなっていて、一段ごとのねじれは各世代を表す。そして、祖父の再来である私の系と私の父の再来である私の息子の系とはどこまでも平行し続け、そのままでは互いに相結び合う事がない。

子供が現在に参入する回路

すると婚入した女性は、「今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する」存在ではなく、むしろ「過去からの遺産を受け継ぐ」存在となるはずだ。子供は大概夫の父の世代の祖先の再来だとされ、その名前を与えられる。だから、女性はいわば過去を「子供」として現在の前方へと生み込むのである。だから、子供は子供である限りは真に現在に参入していると言えない。キプシギス (*Kipsigis*) とは「大人として社会的に再生した (*sigis*) 男 (*Kip-*)」であって、キプシギスの子供はキプシギスではないと言われるのはこの意味だ。過去の再起としての子供を、現在を未来へと伝える存在、つまり「今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する」存在とするには、彼が現在に参入する特別の回路が用意されなければならない。

イニシエーションの論理

あえて先回りして言えば、イニシエーションがそれである。イニシエーションを無事済ま

せた者は以後父称と呼ばれ、祖霊名に代表される幼名の使用は自他共に禁じられる事になる。

伝統社会では次の世代の反抗を放置できる余地も、また個人が社会の統制を免れる術もなく、誰もが単に進んでという以上に、全身全霊をもって社会秩序を受容しなければならなかった。それを実現するには、若者たちの反抗をその大きさのまま丸ごと情緒的な同調へと昇華しおこなせなければならない。下の世代と上の世代の断絶、反抗と統制との衝突を一気に露にしてこの変換を劇的に公示するのが、文化装置としてのイニシエーションの論理なのである。若者はイニシエーションを境に大人へと豹変し、心理と行為のあり方を一変させる。それは蝶や蟬の羽化にも譬えられる根源的な変成である。

見方を変えると、キプシギスでは、子供とは自分の霊魂となって体内に宿っている祖霊の支配下にある存在だ。互隔世代の者同士、つまり祖父母と孫は互いを *agui* と呼ぶが、*Agui* という名前の子供が *agui* という生き物に食い殺される物語が知られている。*Agui* と *agui* の掛け合いからなるこの話に凝縮しているのは、子供とは祖霊と心身的特徴を共有し、絶えずその気紛れに翻弄される脆くはかない存在だという伝統的な子供観である。

祖霊としての子供

キプシギスの伝統的な世界観では、人間と祖霊とは地上界と地下の祖霊界とを回転ドアを潜るように交互に行き交う、相互に移行的な存在様式である。祖霊は、地下でも人間と同様に暮らしている。そして、往々子供を苦しめるか婚入した女性の夢に現れて、子孫の関心を引こうとする身勝手な者と考えられている。

つまりキプシギスでは、死者は忘れ去られるのではない。祖霊は死という休止状態にあるものの依然として家族の一員であり続け、やがてはその中へと立ち返る存在である。一方、この世を離れているがゆえに、社会の目的性や行動規制、つまり秩序の束縛を完全に免れている。

即ち、キプシギスの祖霊の第一の特性は、状況や場面の役割期待を全く度外視した非道徳性 (*amorality*) にあるとされているのである。

老人は子供に返るとか、子供はその体内に入った祖霊自身であるというキプシギス人の言説は、単なる比喻以上のものだ。我々は、内的な必然性に促されており、当該の場面に非関与的で社会性を欠く子供の言動に普遍的な「生の構造」を見ようとする。ところがキプシギス人は、逆に、その背景に祖霊の非道徳性、いわば「死の構造」を見いだすのだ。子供が何時死ぬか分からないはかない存在であるのも、子供を病気にして自分への関心を引こうとする祖霊の身勝手な振る舞いのゆえだという。

生命・人格の確立と父称

割礼とイニシエーションの起源伝承は、それによって子供たちが死ななくなったと気づいた往古の人々がこの制度を確立したのだと言い伝えている。この言説には、キプシギスの名前の論理を知る重要な手掛かりが隠されている。

イニシエーションは子供を大人、より正確には「人間」 (*Kipsigis*) へと変成させる文化装置だが、性器の一部を切除する割礼はその必須の構成要素であり、この変化の不可逆性を身体に刻印する儀礼である。子供から大人への変成とは、祖霊の影響下にある存在からそれを脱した自立的な存在への決定的な移行、つまり自己の生命と人格の確立を意味している。

この変化は、名前の変化として明示される。子供はイニシエーションを終えると祖霊名などの幼名を捨て去り、父の幼名 (*Kip-X*) に基づく父称 (*patronym*) である *arap X* (*X* の息子) という尊称 (正式名) を授けられる。この時に初めて、名前 (*kainet*) の「二重螺旋構造」は接点を得、私の系が私の父の系へと連結されるのだ。そして漸く子供が現在を未来へと伝える存在、つまり「今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する」存在となるのである。

(こんま とおる 神奈川大学、社会人類学)